

樂園の奴隸巫女

目次

一章	3
二章	63
三章	105
四章	159

一章

目を覚ました霊夢の視界に飛び込だのは、見覚えのない天井だった。博麗神社ではない。

「うう……水……」

いつ寝たのか思い出せない。頭がぐらぐらがんと、思考が纏まらない。呻く。

とりあえず水が飲みたいと起き上がろうとするが、失敗した。理由はすぐに分かった。木製の寝台の上に、仰向けで大の字に寝かされていた。手首足首に麻縄がくくられ、台の脚部に結わえられている。つまり、拘束されているのだ。

「何コレ」

不穏だ。顔をしかめ、束縛から逃れるべく腕に力を込める。むろん、少女の腕力で縄を引きちぎれるわけもない。軋む音こそしたが、徒労に終わった。

そもそもここはどこだと、首を巡らせる。畳張りの、六畳ほどの座敷牢だった。霊夢を縛る台座の他には燭台が置いてあるばかりで、殺風景だった。太い格子が出入りを阻み、唯一の入口には見るからに頑丈な南京錠がぶら下がっている。仮に縄を解いても、脱出は容易でない。

どうしたものかと思案しているうちに、牢の扉が音を立てて開いた。姿を現したのは、でっぴり太った中年男だった。

邪悪な気配に、助けに来てくれたわけでないのを察する。人間ではあるが、人を人とも

思わぬ目は、そこらの妖怪などよりよほど退治すべき輩だと感じさせた。

男は霊夢の眼前に立ち、こちらを見つめてくる。優越と性欲の浮かんだ視線だ。

「アンタ……」

闖入者の登場で、重たかった頭がようやく回り始める。意識を失う前に何があったか、思いつき出した。

「うん？ ほほう、驚きですな、まさか話せるとは。あの酒には、普通なら口をきくのもままならなくなるくらい、強い眠り薬を混ぜておいたのですが。さすがは博麗の巫女様、そこらの女とは違いますなあ」

弛んだ頬を持ち上げて、大黒様にも似た笑みを浮かべる。人好きのする笑顔と裏腹に、腹の中は真っ黒に違いない。薄ら開かれた目には、侮蔑の色がありありと込められていた。こいつが、自分をここに閉じ込めた犯人だ。

人里から頼まれて、巫女として仕事をした。依頼人は目の前の彼、里で有数の大地主だ。小作人の畑に野良妖怪が出るので退治してほしい、ということだった。サクッと解決すると、大げさなほど喜び、酒宴に誘ってきた。出された酒に、薬が混ぜられていたのだろう。今にして思えば、おかしな話だった。妖怪退治屋なら里にも居るし、そうした連中でも十分に対応できる案件だった。なのにわざわざ僻地の妖怪神社を頼ってきたのは、全てが

仕組まれたことだったからに違いない。

高額報酬！ お酒が飲める！ と浮き足立ったのが悪かった。相手に黒い噂があることは知っていたのだから、警戒すべきだったのだ。

「あんた、一体何のつもり？」

「これはこれは。まさか察しておられない？ 当代の博麗の巫女様は、非常に勘がよいとうかがっておりますが。まあ、こんな三文芝居に引っかけかかっている時点で、疑わしいものでしたがねえ」

煽る口調で、白々しくも述べる。殺意すら込めて睨みつけるが、妖怪も身をすくませる視線を浴びて尚、彼は平然としていた。

「いやあ、それにしても博麗の巫女が手に入るとは。しかも、こんないい女は、色町では中々見つからない。今夜は素晴らしい夜になりそうだ」

「ッ、何すんのよ！」

男の手が無造作に伸びる。逃げることも許されず、胸に触られる。

浮世離れた彼女でも、不躰にカラダに触れられれば嫌悪感も覚える。暴れば、ぎしつ、ぎしつと、台が軋んだ。

「いやあ、何もクソありませんが。こんな状況で、男が女にすることといったら、一つ

しがありますまい？ 陵辱して、調教して、辱めるのですよ」

「アンタ、後で覚えてなさいよ」

「それは恐ろしい。さて、あなたを性のはけ口にするのはよいとして、ずっと閉じ込めておくわけにはいきません。かといって自由にすれば、後で報復されるのは明らかですな。仕方ないので私も、身を守る策を使わせていただきましょう」

ニタリと浮かべた邪悪そのものの笑みに、やはりコイツは退治するべきだと直感を抱く。歯ざしりしながら睨み付けるが、気に留めた様子はまるでなかった。

男は一枚の手ぬぐいを懐から取り出した。何か染みこませているらしく、湿っている。幻想郷の調停者という立場上、里の裏社会についても多少は知っている。近頃、怪しげな嗅ぎ薬が出回っていることも把握していた。あの布に染みこませているのが、その薬に違いない。まさか自分が使われることになるとは、思ってもみなかったが。

「く、この、ッ、く、む……んんんっ」

「そら、ゲームオーバーだ」

嗅がされてなるものかと首を暴れさせるが、両手両脚を縛られては、無駄な努力というものだ。布は彼女の口と鼻を覆う。呼吸を我慢するにも限界があった。薬毒を含んだ空気が、肺に流れ込む。

裏で流れている、得体の知れない薬だ。効果はすぐに現れた。

「く、う——はッ、ふ、う、は……ッ」

室温が一気に上がった。いや、上がったのは体温だ。全身に火がついたようだ。白い肌は火照り、朱に染まる。少しでも体を冷やすべく、深呼吸を繰り返すが、焼け石に水だ。

もちろん、体が火照るだけで済むはずもない。意識がぐらつく。それこそ、へべれけになるまで酔い潰されたときのように。天地がぐらぐら揺れて、視界が虹色に歪んでいる。自分は仏教徒ではないが、悟りを開けそうだ。

「あつ、あ、あ」

そして、欲情していた。どうしようもないほどに、体が疼いている。ぎちつ、ぎちつと、縄が音をたてた。無意識のうちに、太腿を擦り合わせようとしたのだ。腹の奥が、きゅう、きゅうと疼いて仕方なかった。

「ほれ、もう一度」

「ひいッ……!？」

再び、胸に触られる。愛撫というより、単に手を置いた感じだ。だというのに、彼女は背を反らせる。

先ほどとは全く違って、途轍もなく甘美だった。目を見開き、喉の奥から声を漏らす。

自ら零した声の振動すら、素敵に感じられるほどだ。戸惑う余裕すら与えられないほどの性感を、彼女は無理矢理に引き出されていた。

「ほおう、大した反応だ。普通の女相手なら、まだ薬酒が効いて寝ている時間ですから、こうした反応はなんとも新鮮ですな。いかがです？ 巫女殿。貴方の人生で味わってきた、どんなものよりも素晴らしいでしょう？」

「はッ、あ、う、ひい、あ」

貧乏神と疫病神の異変以来、プリズムリバーの隠れファンをやっている。下卑た声が、彼女らの生ライブより素敵な音楽に聞こえていた。目尻から、ぼろぼろと涙が零れる。

「お試して仕入れてみたが、随分強いクスリだな。普通の女に使うときは、五倍くらいに薄めるか。何にせよ、どんな女も一発で男に媚びるといふ触れ込みは、真実だったわけだ。……ククッ、巫女殿、貴方のことも、娼婦以下の淫乱牝畜に仕立てて差し上げますよ」

「はあ……ッは、あ、あ、く、ふは、はあアッ……」

霊夢は全身を、柔らかく弛緩させていた。例の嗅ぎ葉にそうした効能でもあったのかもしれない。逆らおうと考える余裕すらなかったのも大きい。

惚ける彼女に、男は懐から小刀を取り出し、見せつける。冷たい銀色の煌めきが、宝石の輝きのごとく感じられた。

上等な仕立ての巫女服を、刃が引き裂いていく。無垢なる肌が露わになった。

剥き出しになった体は、二次性徴を終え色香を得つつある。一方でいまだ凹凸の少ないところもあり、あどけなさを残していた。成熟しつつも育ちきららず、垢抜けなさを保った様は、少女の肉体と呼ぶにふさわしい。なまめかしさと可愛らしさを両立させた姿には、この年頃でなくてはありえない魅力がある。絶妙のひとことだった。

輪郭線は、しなやかかつスレンダーだ。博麗の巫女として妖怪に恐れられていることを思えば意外なほどだ。もつとも、本人の可憐な顔立ちにはびったりだが。透き通る肌は、薬にもたらされた興奮で紅に染まっていた。

ほっそりとした首は、絞めれば折れてしまいそうだ。か弱いが、一方でどこか凜としたものを感じさせる。うっすら浮かんだ胸鎖乳突筋による印象だろう。

肩は柔らかかで幅も小さく、ずいぶん華奢だ。巫女という立場を離れば、一人の可愛い女の子に過ぎないのだと感じさせる。鎖骨や腋窩から双丘へと至る線は、彼女だからこそありえる愛くるしさを備えている。

かつて平坦だった胸郭は成長し、乳房と呼べる程度には膨らみを得ている。Cカップの柔らかく瑞々しく張りのあるラインは、まだまだ発育の途上にあると感じさせる。先端は淡く、地肌からじわじわとグラデーションを描いている。乳首はぷっくりと膨らみ、少女

の体を苛む情欲を、ありありと示している。

寸胴だった腹回りは、ここ数年できゅつとくびれた。なんとなく、折れてしまっただ。といっても、不健康なものではなく、あくまで人体が本来持つ美に沿ったものだ。彼女の凜然とした姿に、幻想の儚さを与えてくる。臍はくりつと窪んで、コケティッシュな印象を抱かせる。

「ふう、うむ」

骨盤は緩やかに、女性らしく広がっている。子を産み育むことができるのだと、言外に伝える、安産型の下半身だ。子宮に種を植え付け孕ませてやりたいという獣欲を、見る者に抱かせる。

ほんのりと茂った草叢は、今後の成長を期待させる。秘唇はぴつちりと閉じているが、どこか色香を漂わせていた。蕾が綻びつつある様は、葉に支配された彼女が欲情していることを、はっきりと感じさせる。陰核はぷつくりと膨らんで、自己主張していた。

霊夢の場合、歩くより飛ぶ時間の方が長いのだが、それでも脚はすらりとしなやかだ。弾幕ごっこで蹴り技も用いるので、鍛えているのだ。大腿四頭筋からハムストリングスのラインは、素朴な肉体美を感じさせた。

「ほほう」

男の口から、強い感心の現れた溜息が零れる。邪気は感じられなかった。巫女の健やかなる自然の美が、獣欲や性欲を禊いだのだから。とはいえ、それも一瞬のことだ。呆けていた表情は、すぐ邪なものになる。

「あっ、あ」

いやらしい目が、身体中を這い回る。下卑た視線で見つめられるほどに、霊夢は、ぞくぞくっと震えてしまう。

戸惑いを覚える。こんなふうに見られることは、悔しくて悲しいことなはずだ。なのにどうして、気持ちよいと、もつと見て欲しいと感じてしまっているのか。

「ッ、はあ」

疑問に思うことすら、官能の前に押し流される。ただただ、全身に巡る媚毒によって、甘い悦びに浸らされる。

彼の手が再び、体へと伸びてくる。先刻あれほど嫌がっていたというのに、今度は身をよくじろうともしなかった。剥き出しになった自らの肌へ、浅黒い指先が近づいてくる様を、荒い呼吸を繰り返しながらじっと見つめていた。

「ひんッ……！」

太い指が、すつきりした首から、ゆっくり下りていく。鎖骨の付け根あたりから、外へ

向かって進んでいく。

どちらかといえばマッサージに近い動きだ。だというのに、性感に体が震えてしまう。異様なまでに、全身敏感にされている。

「あ、はッ」

これで、性感帯に触られたりしたら、一体どうなってしまうのか？

戦慄と同時に湧いたのは、期待だった。

「く、んう、うう、はあん……」

指は肩を撫で、腋窩を柔らかくなぞってくる。甘ったるい心地よさとくすぐったさに、身をくねらせる。

続けて、彼は柔らかな膨らみを狙う。揉むというよりは、単に撫でているだけ。とても愛撫とも呼べない行為ながら、ひりつく快感を覚えてしまう。

「ッ、は、あ、ああ——ッ、んう！」

目を見開き、体を踊らせる。ぎちっ、ぎちっと、縄が軋む。暴れているわけでないのは、法悦の籠もる声から明らかだった。性感を脳髓に教えこむ手つきで触れられると、ぶるりと腰から全身を震わせる。

「ははは、たまらんようですなあ、んん？ 　いかな博麗の巫女といっても、性欲には抗え

ないわけだ、ククッ」

勝ち誇った猫撫で声で囁いてくる。気色悪いはずなのに、もっと聞きたいと思わされる。はあ、はあと、胸郭が上下する。瑞々しい乳房も、小さく震えている。体中にうっすら汗が浮かんでいた。燭台の火を反射して、きらきらと輝いている。

男は指を、さらに下へ滑らせていく。うっすら浮かぶ肋骨をなぞりながら、腹へ。染み一つない平坦な腹部を、優しく撫で回す。臍に浅く指を入れ、くり、くりと刺激してくる。「ツう、あう、んうう——ツ」

普通なら、そんな行為で性感は生じない。今だけは例外だ。腹膜を隔てて、子宮を愛撫されているようだった。生殖本能を刺激されながらも決して達せない、絶妙なもどかしさ。唇をきゅつと噛みながら、しきりに腰を疼かせる。

なおも、手の侵攻は止まらない。このまま行けば、非常にデリケートな部位に到達するだろう。貞操を踏み躪られようとしている。全くもってよろしくない状況なのは分かる。けれども、抗えず、拒めない。縄で縛られているという、単純な理由からではない。彼女自身が期待している。うず、うずつと、大事なところをヒクつかせ、刺激を求めている。

大きく広げられた脚の間、魅惑の三角地帯へと指は伸びる。臍から真っ直ぐ下、ふわりとした茂みに至る。

「ほお。よく濡れておりますなあ、ええ?」

「あつ、あつ、あ、ヤツ、それ、あう、あああつ」

指の腹でとんとんと、茂み付近を優しく叩かれ、腰がくねる。言葉に偽りはなかった。秘唇は既にとろとろになっており、ねっとりした涎を滴らせている。木製の台に、秘蜜の染みができあがっていた。

「ああッ、あ、あッ、ああ……! つ、あッ!」

とうとう、指が、彼女のいちばんだいじなところに触れる。尺取虫のごとく、入口近くを優しく這い回ってくる。

「ふむ。巫女殿が何を望んでいるか、私には手に取るように分かりますよ。ここを舐めてほしいのでしょうか? 後先のことなんてどうでもいいから、ここを、たアアアアアつぷりほじくって、体を満ちた熱をなんとかしてほしいのでしょうか?」

「あッ、う、う、あ、ううううッ……!」

とん、とんと、恥部近くを優しく叩きつつ、再び囁いてくる。言葉はもはや毒も同然だ。自らの陰部が、指に舐りたてられる様を想像してしまう。飢えきつた身体にはキク空想だ。早くそうしてほしいと言わんばかりに、一本筋の裂け目は粘度の高い涎を溢れさせる。

「どれ、お望み通りにして差しあげましょう」

彼の言葉に、胸が高鳴った。貞操を踏み躪られることと同義だというのにだ。しかも、自らのほしたなさを反省する暇すら与えられない。宣言通り、すぐさま指がねじ込まれた。

「あッ、あああああッ……！」

業火に焦がされるような声であり、肩まで風呂に浸かったような声でもあった。背筋は反り、腰は浮かび、くねる。臉は見開かれ、瞳は虚に宙を見つめていた。目の裏でチカ、チカ、と弾ける火花を見ていた。

彼がしたのは、別段大したことではない。人差し指を第一関節までくぐらせたただけだ。にしては大層な反応に思えるかもしれないが、何も大げさではなかった。発情しきった、しかし経験の浅い少女の狭穴には、異物が入り込むという時点で一大事だったのだ。

「ふむ？　ずいぶん垢抜けない感触だな。指すらも入れたことがあまりないのか。まあ、好都合か。モノを知らぬ小娘を、快楽依存に仕立て上げてやるのも一興。ましてそれが、博麗の巫女ともなればなあ、クククッ」

「ッ、あう、あッ、は、ああ、やあ、あくううッ」

男はそのまま、入口の酷く浅いあたりに、指先を抜き差ししてくる。驚く肉体を刺激に慣れさせ、快楽をじっくりと味わわせようというのだ。

そうした目論見があったのだとすれば、大成功だ。ちゅぷ、ちゅぷと、しゃぶりつく

音が下半身から響く。そのたびに声は、たまらないといわんばかりに甘くなる。

「あう、ああ、あう、あつ、あつ、あつ、ああッ」

彼女の腰が、僅かに大きく自由を駆使して、踊っている。蹂躪者から逃げようとしているのだと、言い張れなくもないかもしれない。とはいえ、無理筋な主張にはなるのだから。その様は、さらなる快楽を求め腰をくねらせている風にしか見えなかったのだから。

「すっかり夢中なようですなあ？ どれ」

「ひッ——あッ、あああああッ!？」

慣らし運転を終えた指が、本格的に動き始める。巫女の穴を中から解すべく、ぐちゅ、ぐちゅと掻き回し始める。

肉襞をめくられ、快楽神経が強烈に刺激される。がくッ、がくッと、体が震えている。拘束されていなければ、たちまち寝台の上から転げ落ちていただろう。

体内からぐちゅ、ぐちゅと音が聞こえるたび、後頭部を直撃するエクスタシーが走り抜けていく。苦痛ならともかく、こんなに甘くて素敵な感覚が相手では、博麗の巫女でも対抗などできない。まともにものを考えることを放棄し。下半身から伝わる強烈な多幸福感に酔いしれるばかりだ。

男は指を駆使しながら、次第に奥へ奥へと進んでいく。無垢なる洞窟を、卑猥な雌穴に

仕立て上げながら。その進行を阻むものは、何ひとつなかった。なかったのだが、不意に彼は、動きをとめた。

「ほほう、やはり……」

小さな眩きが漏れる。顔には、明確な悪意と、そして異様な興奮が浮かんでいた。

「流石、神に仕える巫女だ。清らかな体でなくてはならぬということですか？」

「あうッ、あ、ッは」

太い指先が、薄い膜に触れていた。博麗霊夢が未通である証、処女膜だ。

指がもう少し奥に進もうとすれば、純潔は永遠に喪われる。危機的状况だというのに、霊夢は拒む言葉の一つも漏らさない。それどころか、続きをしてほしいといわんばかりに、腰を揺らめかす。はーっ、はーっ、はーっ、と、深く深い呼吸を繰り返すたび、胸郭が上下していた。「おやおや、もうすっかり快楽に夢中と見える。いやはや大した薬だ。継続的な仕入れも検討するか。それで？　巫女殿。どうして欲しいのです？　言つてごらんさい」

「……ッ、ふ、う」

彼女の目に僅かばかり理性が戻り、眉根がきゅつと寄せられる。屈するわけにいかぬと、目の奥で炎がちらつく。

ぶら下げられた餌はあまりに甘美で、そうでなかったとしても、そもそも抵抗できない。

絶望的な状況でなお抗おうと思えるのは、驚異的な精神力のなせるわざだ。だがそれも、次から次に押し寄せる情欲の波の前に、すぐさまかき消えた。

「ッ、は、あッ、う……、葉の——せいだもん」

求めたい。

求めるわけにはいかぬ。

二つの相反する感情が、一つの妥協案を打ち立てた。

なにもかも、葉のせいだ。見られ、触られて気持ちよくなってしまうのも、彼の行為をもっとほしいと願ってしまうのも、全てはあの葉のせいなのだ。

ぼつりと漏らした眩きに、男は鼻を鳴らす。

「ええ、ええ、そうでしょうとも。葉のせいでしょうとも。今は、その言葉だけでよしとしましょう」

今は、の部分を男は強く強調した。ということは、真には満足していないということだ。なら、彼が満足するところには、自分はどんな風にされてしまっているのだろう。今でさえこうまで狂わされてしまっているのに。

想像もつかなかった。つかなかったが、言葉にしがたい期待が胸にこみ上げていた。

「ッあ、う、はあ」

指先は、靈夢を純潔たらしめる薄膜を、優しくなぞってくる。力加減を間違えたただけで、膜は無残にも破られる。

甘美ながらもスリルのある感覚に、眉尻が垂れ下がる。ぞくつ、ぞくつと、腹の奥からエクスタシーがこみ上げる。もたらされる官能に、すっかり夢中になっている。

「あつ、あ、やだあつ」

だというのに、彼は指を引き抜いていく。靈夢の口から、初めて拒否の言葉が溢れた。本来あるべき意味——やめてほしい、ではなく、やめないでほしいという意味を示して。大好きなぬいぐるみを取られてしまったような、心細さと寂しさが表れた声色だった。

なおも指は止まることなく、とうとう膣口から抜けてしまふ。よほど離れたくないのか、ちゅぽ、と卑猥な音をたてる。解された彼女の花は、はしたなくもヒクついていた。

「ううん、んう……ッ」

むずがる声をあげ、腰をくねらせる。はあ、はあつと、甘い声をしきりに零していた。「おやおや……。気持ちちは分かりますが、淑女がそんな声をあげるものではありません。今から、もっと素晴らしい思いができるのですから」

もっと素晴らしい思い。

先ほどの、指で弄られるのよりも良いというのか。いったい、どれほどのものなのか。

現金なことに、腹の奥がきゅんっと疼く。まさに今まで、物寂しさを感じていたことなど、すっかり忘れ去っていた。

「どおら、じっくりご覧なさい」

男が、自らの衣服に手をかける。脱衣しようとしているのだ。

中年男の裸体など、見たいものではない。だのに彼女は、目の奥に期待を浮かべていた。男がその体を露わにする。胸毛が黒々と生え、太鼓腹が見苦しい。だが、霊夢の視線はそんなところには向けられていない。見ているのは、下半身だ。

ギョツと締まった六尺褌は、股座のあたりがこんもりと盛り上がっている。何故かなど、考えるまでもない。

「ほおれ……」

「あッ、は、やだ、あ」

彼がソコを、顔のすぐ側に近づけてくる。あと少し傍に寄れば、褌と頬が触れるだろう、というくらい近くまでだ。

汗っぽい、濃厚な男の匂いが漂ってくる。汚くて、嫌な匂いのはずだ。にも関わらず、もつと嗅ぎたいと感じてしまう。胸が高鳴り、唾が溢れだしてくる。

「ククッ、すっかり夢中なよう。なら、ホンモノを見せて差し上げましょうか」

「アッ——」

小さく、声が漏れた。そんなものは見たくないという僅かな思いと、ぜひ見てみたいという強烈な欲望が、ない交ぜになっていた。

結局、葛藤する時間すら与えず、彼は無造作に禪を解いた。布の内側で戒められていたモノが、バルン！と勢いよく飛び出す。押えられたバネが解放されたときのようだった。姿を現したのは、恐ろしい怪物だった。巫女として活動しているときであれば、間違いなく退治していたといえる。

太く雄々しく、天に齒向かうかのごとくそそり立っている。亀頭は鉄兜のようであり、槍の穂先のようにもある。雁首は深々と刻み込まれ、千尋の谷を思わせる。

幹はびきびきと力強く存在感を主張し、見る者を圧倒させる。表面を這い回る血管は、大理石に飾り彫りをしたかのようにくつきりと姿を浮かべている。

陰毛は密林よろしく生い茂って、生命の力強さを感じさせる。根元で膨らむ二つの玉は、ばんばんに膨れ上がっていた。

ソレが姿を現した瞬間、立ちこめる臭気が一際強くなった。匂いの出所がどこなのか、如実に物語っている。霊夢の鼻孔が、しきりにヒクついている。このクセのある、しかし夢中になる香りを、もっともっと愉しみたかった。

「あは、あ、あ、ああん」

男性のそこを凝視するのがどれだけはしたないか、今の霊夢にだって分かる。けれども、目を離すことができなかつた。呪縛でも受けたかのように、視線は縛り付けられている。すつかり、雄の股座に潜む怪物に魅入られていた。

「おやおや。一目見ただけですつかり夢中と見える。いくら薬が回っているとはいえ、元から相当な色好みでなくてはこうはなるまい。博麗の巫女ともあろう御方が、随分とまあいやらしいことで」

見下され、罵倒されている。耳に届いてはいるけれども、聞いてはいない。眼前の怪物に近づきたくて、触れたくてしようがない。手足を縛られていることを、ひどく恨めしく感じていた。

「そら、もつと嗅ぐんだ」

「んふ、んうウツ、んふうう……ッ」

言われるまでもなかつた。はあつ、はあつと、口から甘い吐息を零しながら、鼻呼吸をも繰り返す。スメグマの臭気を、肺いっぱいに取り込む。恍惚に、頭がくらくらしてくる。

「どれ、今のうちに……」

「ひ、いッ、あッ、つくひいいッ！」

男の指が、また彼女の股間に伸びる。今度は、秘裂を責めはしない。代わりに、とろりと解れた裂け目の端、ぶっくり膨れた肉豆を、指先できゅつと摘まんできた。突如として走った強烈な性感に、腰が浮き、碎ける。目は見開かれ、喉から詰まった嬌声が溢れた。「ああ。やはり。ずいぶん大きいから、もしかしてと思いましたが、巫女殿はクリオナが大好きなようで」

何の言いがかりでもなく、事実だった。浮世離れた博麗の巫女も、れっきとした人間で、少女だ。夜ごと疼きを覚え、己を慰めることもある。その際、裂け目のほうは怖いからと、もっぱらクリトリスにばかり触れていた。散々突かれた陰挺は、今やすっかり膨らんで、一目で分かる弱点となっている。

「ちよつと触れられただけでこれほど感じるとはね。いやはや、情けないことだ」
「アッ！ ひッ、はうッ、あくうッ、や、あ、ああんッ！」

あざ笑いながら、指先でとんつ、とんつと叩き、さらには転がしてくる。自分で弄るのは全く違う、痺れるようでありながらも幸せな感覚に、正体をなくしてよがるしかない。そうしている間も、肉棒は目の前にある。嬌声をあげ、息を吸う度に、臭気が肺に流れ込んでくる。ペニスの臭いと快楽が、頭の中で結びつけられていく。

ときおり、ぺちっ、ぺとつと、柔らかな頬に亀頭がぶつかっている。他人のシモを押し

つけられているわけだが、彼女は嫌がりもしなかった。むしろ、もっとその熱を感じたいといわんばかりに、自ら押しつける始末だった。

「あッ——」

そんなことをしていれば、事故る。

思わず、声を漏らした。ぶらぶらと揺れていたモノの先端が、唇に触れたのだ。

あまり大きな接触だったわけではない。ちよんっと、亀頭がちよんっとぶつかっただけなものだ。それでも、霊夢にとってみれば、大事だった。何せ彼女は、接吻をしたことがなかったのだから。

ファーストキスを、中年男のシモに捧げた。

ふつくと柔らかかにかつ艶やかな少女のリップを、陰茎のために消費した。

「あああ……っ」

この事実は、決して消えることのない汚点となるだろう。だというのに、覚えたのは、蕩けてしまうほどの恍惚だった。

唇というのは人体でも特に敏感な粘膜の一つだ。そこで味わうペニスの熱は、とてつもないほどに素敵だった。驚くほどに硬くて、逞しくて——いかな博麗の巫女であっても、一発で虜になってしまう。

「はっ、はっ、あは……っちゅうっ」

自ら、ソレに唇を近づける。もう一度、口づける。今度は、事故じみた僅かな接触ではなく、しつかり。柔らかな唇が、男根に押しつけられ、むにゆりと形を変える。ちゅっと、リップノイズが鳴った。

なんて大胆なことをしてしまっているのだろう。はしたないなどという言葉では、到底済まされない。——だのに、どうしてこうまで、素晴らしく感じられてしまうのだろう。

「んうッ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅ、んちゅッ、んっん、ちゅっ、んむうう」

もう、止められない。何度も何度も、唇を近づけてはキスを繰り返す。さながら、一年ぶりに彦星と再会した織り姫のごとく。

すんすんと、鼻で呼吸しながら、濃厚な匂いを愉しめば、じゅわっ、じゅわっ、秘唇から愛蜜が溢れてくる。もはや下腹は、到底少女と呼べない有様になっている。娼婦より淫らで、卑猥だった。クリトリスをこねられる性感に酔いしれながら、彼女は何度も、唇の初めてを奪ったソレを愛していく。

「ふうむ。そろそろ頃合いか」

「あっ、ん、んうう……」

男の指が、陰核から離れていく。快感はちよっとキツいくらいだったのに、なくなると

とても寂しく感じられた。おもわず、へこつ、へこつと、空腰を振ってしまいうくらいには、情けないことだと鼻で笑いながら、男はこちらに向き直る。

「どうです？ 巫女殿。初めてのチンポは。たまらんでしょう？」

「はあッ、は……」

彼女は答えを返さない。燃え上がる興奮に、全身に汗を浮かばせている。そんな状況で、まともに会話ができるわけもない。ただし、どう感じているかは、簡単に分かる。瞳の奥で煌々と燃えている、情欲の炎を見れば。

男は肩をすくめると、可愛らしい鼻を摘まむ。呼吸もできずに口を開けば、すぐに肉竿が突き出される。

「しゃぶりなさい」

短い言葉には、有無を言わさぬものがあつた。聞く義理など何一つとしてないはずだが、逆らえないものを感じさせる。

霊夢自身、逆らおうとは露とも思わなかつた。すてきなものに触れさせてくれるのに、どうして嫌だと言う必要があるだろう。

「えあ、れるう……くっふううう……ッ」

開かれた口腔から、舌が伸びる。亀頭に、ちよんつと触れる。それだけで、味覚が麻痺

した。味蕾を通じて伝わった強烈なえぐみは、もつと味わいたいと思わずにはいられないものだった。自分がどれだけとんでもない、はしたないことをしているかなど、まったく考えてもいなかった。

清くあるべき巫女らしからず、彼女は五欲への執着が深い。当然、色欲についてもだ。文字通り目と鼻の先にあるソレに、アツという間に夢中になっていた。

「れるッ、んふう、れるっ、れる、れるうう」

舌先で、れるっ、れるっと舐め回し始める。亀頭に始まり、鈴口、雁首、裏筋、幹にと、各部位を探索するように、舌を這わせていく。唾液の痕が、力強く勃起した肉幹に残る。

少女の唾液は陰茎への何よりの回春剤だったようで、魔羅は一層巨大になる。霊夢は瞳を蕩かして、その様を見つめていた。

「れるッ、れる、れるおおっ、れる、えあ、える、れるれるれるろ……っ」

「お、おッ、ンフウ」

舌使いは次第に大胆なものになっていく。れる、れる、ぴちちと、唾の音をたてながら、紅梅色の舌を踊らせる。男は鼻息を漏らしながら、ぞくっ、と腰を震わせた。

博麗霊夢は天才だ。並外れた才覚は、陰茎奉仕の場においても遺憾なく発揮されていた。匂いと味の強い、鈴口や雁首あたりを重点的に舐め回しているのだが、それが奇しくも、

男性にとつての性感帯と一致していた。

「レろお——んう、くうん……」

とはいえ、れろれろと舐め回されるだけで彼が満足するはずもない。素敵な棒は離れていつてしまう。首を起こし、舌を伸ばすが、ぎりぎり届かない。もどかしさに、犬の鳴き声に似た愛くるしくも切ない声が漏れる。

「どうやら、巫女殿は日本語がお得意でないご様子で。私はしゃぶれと命令しましたが？ 誰が舐め回せと言いましたか？ まあ、あれはあれで悪くはありませんでしたが、言葉は正確に解釈していただききたいものですなア」

「あんっ、あぁッ」

再び魔羅を近づけてくる。言われたことをちゃんとやらなかったお仕置きだともいうように、亀頭でびしっ、びしっ頬を叩いてくる。男根で嬲りにされているというのに、漏れるのはうっとりとした声だった。頬から伝わる熱がたまらなかった。

「ホレ。もう一度だ」

短い言葉とともに、竿が眼前に突き出された。

改めて眺めるに、とてつもなく恐ろしい姿をしている。グロテスクで、怪物のようで、とても人間の体の一部だとは思えない。だというのに彼女は、ソレから目を離せなかった。

悪霊に魅入られたかのように、ソレへ唇を近づけ、先端に口づける。むちゅう、と音がした。緋々色金より硬い亀頭に、少女のリップが触れた音だ。まともに口づけを交わしたことから一度だつてないというのに、随分と熱烈なキッスだつた。

しかも今回は、それで終わりではない。透き通るほどに瑞々しい薄紅色の唇は、じわり、じわりと、赤黒い先端を包み込んでいく。亀頭全てを呑み込んでもお終わらず、さらに深く、深くへ向かう。黒光りする鉄の棒をも迎え——とうとう、根元までをも咥え込んだ。「んっふううう……」

深い吐息が、喉の奥から漏れた。

鼻先が、陰毛の密林に埋もれてくる。呼吸をするたび、濃厚な男性の匂いが肺を満たす。体内から陵辱される感覚に、トリップしてしまいそうだった。

そしてなにより、この口腔内の魔羅の存在感。舌を火傷しそうなほど熱い。じくじくと粘膜を通じて、犯されているかのようだ。だというのに、もつと感じたいと思えてしまう。蛋白臭と痺れる苦みを、もつと深く味わいたくしようがなかった。

幸いにして、自分には大手を振ってそうできる大義名分があった。彼の命令のことだ。命令なのだから、仕方ない。言われたまま、男根を自らの口腔で愛し始める。

「んふうッ、くぷッ、ぢゆるッ、んふう、れるッ、れる、ぐぶ」

頭を前後させて、唇で肉竿を扱く。ちゅぷッ、くぷっと、唾液の音が室内に響く音が、
どれだけはしたくないことをしているかを、否応なしに自覚させてくる。

だからといって、止めることはできない。肉棒の存在を感じれば感じるほどに、媚毒に
冒された肉体が、もつともつととせつついてくる。欲望が彼女に、どこまでもはしたくない
ことをさせる。

「んふうう……んもっ、れる、れるっ、れろ……ちゅうううッ」

たとえばこうして、舌で肉魔羅を舐め回してみたり、だ。れろれろと、今度は舌先のみ
ならず、舌全体を男根に絡ませていく。嗅覚と味覚全てで、ペニスを感じていく。

雁首周りが一番のお気に入りだったが、それ以外の部位も素晴らしい。亀頭のぷにぷに
した感触は面白いものだったし、竿部の熱は惚れ惚れとさせられる。

「むちゅッ、んちゅ、くぷッ、れるお、んふう、れろッ」

気づけば、口腔全てで、男性自身に尽くしていた。こぼれた唾液が頬を伝うが、気にも
留めていかなかった。

「むう、まさか、これほどとは……」

男が腰をぞくりと震わせる。

重ね重ね、博麗霊夢は天才だ。人生初のフェラチオで、こうまで相手を感じさせるなど、

彼女でなければ無理だ。

「んふふ……れろれろろ……んちゅッ、んちゅッ、んう……」

男の反応に気を良くしたか、調子乗りの気もある霊夢はいっそう、口淫に熱を入れる。何となくこうしたら気持ちいいんじゃないかという、天性のセンスからもたらされる閃きを、存分に駆使していく。

実際のところ、技術的にはもつと上があるだろう。色町の娼婦でいえば中の上ほどで、いわゆる高級娼婦には及ばない。だが、そうした不利を補って余りあるものが、霊夢には備わっていた。つまり、情熱だ。

得体の知れぬ薬に浸された身体は、性の悦びを求めてやまない。やらしいことをしたいと思う気持ちだが、技術の巧拙という枠を越えて、フェラチオの質を高めていた。

「ん、くッ、ん……ッ」

素敵なものをいっばい舐められて、霊夢はすっかり夢見心地だ。もつとも、そのような口淫は、今の彼女にとっては諸刃の剣でもある。腹の奥が、きゅうッ、きゅうッと疼いて仕方ない。知らず知らずの内に、腰がくねっていた。さっきみたいに指で虐めてほしい、といわんばかりに。

「おやおや……心身共に清らかであるべき巫女様が、なんとまあ浅ましいことか。まるで

雌犬ではありませんか？ 恥はないのですかね」

男が何か罵ってくるが、ろくに聞いてはいなかった。もっとコレを味わいたい、あと、気持ちよくなりしたい。二つの原始的欲求が、脳味噌を支配していた。

「やれやれ、薬の効きが良すぎるのも考えものか。よっと」

「んぷうっ。んっ……う、ねえ……その」

ぬぼっと、ワイン瓶からコルク栓を抜くような音が響いた。男が己自身を、霊夢の口腔から引き抜いたのだ。

口腔の切なさ、唇を噛みしめる。もう一度おしゃぶりさせてほしいと、甘く媚びた声を漏らす。はしたないで済まない様を、男は嘲笑した。

「ははは、博麗の巫女様ともあろう御方が、なんとというザマでしょうな。心配せずとも、もっと良いことをして差し上げますよ、もっともっと、ね」

言いながら彼は、霊夢を縛る台の上に乗っかる。少女の体に覆い被さるように、ただし、互い違い——つまり、互いの眼前に互いの股間がくる姿勢で。シックスナインの体勢だ。

「あはあッ——」

視界に映る、中年男性の下半身。最悪の光景だ。だが彼女は、これ以上なく瞳を蕩かす。なにせ、大好きなモノが目の前にあるのだから。

「そら、せいぜいよがれ雌犬」

「あッはあああッ！」

白い喉を引き絞り、熱い声を上げる。下半身に走った熱い快感ゆえだ。がくつ、がくつと、腰を震わせる。

期待に疼く霊夢の下半身を、男は指で觸っていた。夜ごとの自慰でぷっくり膨れた肉豆、己が純潔であることなど忘れて涎を垂らす裂け目を、つつき、擦り、摘まみ、穿つ。

「あつ、あ、やつ、あはあッ、やん、あッ、あう、くう、んううう！」

痺れるようでありつつも甘い性感に、深く甘く感じさせられる。待ち望んでいたものに、悦びの声を抑えられない。少女のあられもない声が、座敷牢に反響する。

「どおーれ、味はどうだ」

「ひんッ!？」

先ほどまでとはまた違う、引きつった声をあげる。腰に走った、怪しい感覚ゆえに。

蛞蝓が肌を這うのに似た、ねっとりとした感触。舌で舐められたのだ。

「あうッ、や、ッ、そんなとこ、あ、ああッ」

「れるッ、れるうッ、ぢゆるッ、ぢゆるる」

恥ずかしいところを舐められることに、堪えがたいほどの羞恥を覚える。やだ、やだと

身をよじるが、抵抗にもなりはしない。

むしろそうして恥ずかしがる様が、男をたきつけたらしい。れろ、れろっと、わざわざ音を立てながら、秘唇を舐め上げてくる。

「ひッ、は、あうッ、あ、はッ、あああッ」

正直いつて気味が悪いが、一方で、妖しげな性感もある。官能は生理的嫌悪感を次第に薄れさせていく。嫌悪がなくなるにつれて、新たな感覚を公平に評価できるようにする。指で弄ばれるのと一風異なる感覚は、やみつきにさせるものだった。

「ッく、ッ、あ、っひ、んううッ！」

舌先が陰核を突く。ピリピリした感覚に、腰を躍らせる。秘唇の内側に潜り込む舌先に、鬚の一枚一枚を暴かれていく。性交を経験したこともないのに、快楽好みの穴にすっかり造り替えられていく。

「あう、そんな、音、ッ、あ、やつ、あああッ」

クチャ、クチャッと、口を開けて飯を咀嚼するような音が響く。しとどに溢れる愛蜜を、味わわれている。羞恥に、頬が赤く染まる。そんな風にしなないと聞いたかったが、言葉は喉から漏れる嬌声に上塗りされてしまう。

そうして恥をかかせておいてなお、男は飽き足らないらしかった。やんごとなき裂け目

を翳りたてながら、陰核を指先で転がしていく。

「ッ、あうううつ、あ、ああああ……ッ！」

妖しげな官能と、痺れるエクスタシー。絶え間なく続く二種の性感の前には、いかな博麗の巫女とて可愛くよがり狂うしかない。はしたなくも甘い声をあげながら、身を焦がすような性感を脳髓に刻み込まれていく。はぁッ、はぁつと、荒い呼吸を繰り返す。目の裏で、チカチカと白いものが光っていた。

瞳は無意識のうちに、目の前のモノを追っている。彼が身を動かす度に、ゆら、ゆらと揺れるペニスを。まさに目と鼻の先に、好きでもない男の肉棒がぶら下がっている。嫌悪を覚えてしかるべき、地獄じみた景色に感じたのは、口の疼きだった。

霊夢は良くも悪くも素直なたちだ。したいと思ったことは、すぐに実行する。先ほどと同じく、モノを口腔に迎えてみせた。

「んふッ——ンッ、ふうう」

ぢゆるつ、ぢゅぶつと、粘っこい音が響く。興奮にネットついた唾液が、雄杭に絡みつく音だ。男が純潔の穴にしゃぶりつく、品のない水音が合わさる。卑猥なデュエットだ。

口内に満ちる肉棒は、先ほど以上の熱を帯びていた。博麗霊夢という美少女の愛蜜は、何よりの強壯剤となっていた。逞しさに嬉しさすら感じながら、ちゅぽつ、ちゅぽつと、

唇で肉茎を扱き勃てていく。舌を蠢かし、れるれろと舐め回す。

体勢が体勢なので、視界には男の会陰が大写しになっている。玉袋が時折、ぺち、ぺち、と鼻筋を叩く。最悪のシチュエーションを、彼女は受け入れ、愉しみすらしていた。玉裏の濃厚な臭気を、鼻孔をヒクつかせ何度も嗅ぐ。芳香とは口が裂けても言えないが、臭いのほどクセになるのは世の常だ。すっかり、陰茎臭の虜になっている。

「ぐッ、ぶッ!」

そんな中、男が不意に腰を落としてきた。当然、肉竿は口を深々と貫く。喉奥までだ。そのあたりは、固形物が入ることを想定したつくりになっていない。生理的反応として、横隔膜がせり上がる。

だが、男はお構いなしだった。腰を浮かせては叩きつけてくる。少女の口腔を、ペニスを扱くための道具にしているのだ。

「ッ、ぶッ、ぐッ、おぐッ、んううっ! ぐウ、んうウ、んんううう!」

もちろん、苦しい。喉深くまで蹂躪されては、ろくに呼吸すらできない。ごり、ごりと、自らの口内が拡張されていく感覚に、目尻から涙が零れる。

「んうッ、くッ、ふウッ、ゲ——んううううウ!」

そんな彼女を、男はさらに廻り者にする。下半身への責めを、一層激しいものにする。

ぐぢゅぐぢゅぬちゅと、舌が体内で踊る音が聞こえる。陰核が虐げられるたび、痺れる性感が背骨を通り抜けていく。

いかな博麗の巫女でも、平気はいられない。上の苦しみと下の快感、二つの強烈な感覚に思考がトぶ。まっさらになつた脳髓に、快楽が刻みつけられていく。

霊夢の中で、喉奥を颯られる口腔陵辱の苦しみと、クンニリングスによるエクスタシーが結びつけられていく。犬がベルの音で涎を垂らすごとく、イラマチオで子宮を疼かせるはしたない女へ造り替えられていく。

「ぐッ、んぶッ、ご、ぐッ、……んうッ、ふ、うゲッ、んうッ、ん！」

苦悶の呻きが、次第に嬌声へ変わり始める。苦痛と快楽をセットにした調教が、早くも功を奏し始めたのだ。腰が浮かび、突き入れられ、男根に串刺しにされるたび、甘い声が喉から上がっている。

そんな素敵な責めを受けて、長く堪えられるわけもない。自らの中で、大きいうねりが立ち上りつつあるのを、霊夢ははつきりと感じていた。夜ごとの自慰の終わりに、いつも感じていたもの。絶頂の予兆だ——多分。多分と但し書きがつくのは、今感じているのが、今までのと本当に同種か疑わしくなるほど大きかったからだだった。

媚毒に冒され、異性に颯られ興奮の極みにある以上、平時の自洗でのオーガズムとは全

く違うものになるだろう。いったいどうなってしまうのか、想像もつかない。一つ分かるのは、自分がほんの数秒後、そこへ容赦なく叩き込まれるということだけだった。

「ンヂユルウウウツ」

男も、彼女が限界に近いことを悟っていたのだろう。とどめだといわんばかりに、最後の一撃を叩き込む。剥き出しの弱点をキュツ、と摘まみあげ、膾裏のざらついた性感帯をヌルルツと舐め上げる。発情した小娘一匹アクメさせるには、十分すぎた。

「ッ！ く、うツ、ふ、う、んうううううううッ……！」

くぐもつた高い嬌声を座敷牢に反響させながら、霊夢は快樂の頂点に至る。がくがくと体が震え、身を戒める縄がギチギチと軋む。背は反り、体は踊る。目は見開かれながらも、瞳は虚だった。視界の裏側でスパークする快樂信号の瞬きを見つめていた。

こんなにも気持ちよくなったことは、今まで一度だつてない。強烈な性感は、真っ白な頭の中で、「素敵なもの」の領域に深く刻みつけられていく。

それでもなお、男は満足しなかった。巫女を墮落させるべく、さらなる一撃を加える。

「ぐ、むツ、んぼおッ」

口内のモノが引き抜かれる。ぬぼおんツ、と、卑猥な音が響いた。どれほど熱烈に吸い付いていたか、明白に物語っている。

「そおら、出すぞオツ」

「あはッ、あ、ああああ——ッ！」

男はそのまま、睾丸の中の汚濁を解き放った。濃厚極まる欲望の塊が、輸精管から尿道を通じ、ぶりゅぶりゅと音を立てて鈴口より放たれる。

物理法則に従い、スペルマは彼女の顔面に着弾する。密かに自慢にしている美貌を中年男の体液で汚されているというのに、あがるのは蕩けた、恍惚の声だった。

当たり前のことだった。肉棒の素敵な熱、臭い。そのほんとうの出所がどこだったか、ようやく理解したのだから。コレだったのだ。額、眉、瞼、鼻筋、小鼻、人中、頬に顔をべちゃべちゃと汚すスペルマこそが、芳しい臭いを醸し出す張本人だったのだ。

「あはあッ、あはあ、ああっ、あんっ、あ、あ、ああっ」

他人の体液など浴びせられて嬉しいものではない。だが、大好きなものなら話は別だ。絶頂の余韻に蕩けた声をあげながら、男のDNAを受け入れていく。

無意識のうちに、口を開き、舌を突き出していた。ピンクの口内粘膜に、ぎとぎとした脂っこい粘液が容赦なくぶちまけられていく。味蓄で感じるソレは、やはりひどく熱く、そして痺れるほどにえぐかった。

「あう、ッはああああ——ッ」

呼吸をすれば猛烈な雄臭が流れ込んで、嗅覚を麻痺させてくる。まったく、たまらない。今まさに達したばかりだというのに、またイッてしまいそうだった。

「あう、は、あはああ……」

やがて、肉棒の脈動が終わる。漏れたのは、汚されたことに対する悲嘆の溜息ではない。素晴らしいものと出会えた悦び、そして素敵時間が終わってしまったことを惜しむ寂しさが、はつきりと現れていた。

「いやあ、出した出した。そこらの町娘をハメ倒すよりもよほど出ましたよ。クククッ、やはりレアものはイイ、それだけで数割増しで出る。ましてこんな雌犬気質の娘となればなおさらだ……」

「んむむうっ」

男の独白に、何かしら反応することはできなかつた。射精したばかりの肉棒を、顔面に押しつけられたからだ。

体を揺らし、肉幹を、ずりずりと押しつけてくる。顔中にべっとりとは付着した濁液を、竿をへら代わりにして塗り広げて、擦り込んでいるのだ。

こんな風にされたら、ペニスの臭いが、中年精液の臭いが、どれだけ洗っても落ちなくなってしまうかもしれない。だのに彼女は、うっとりした吐息を漏らし、されるがままに

なっていた。

「ああん……っ」

始めこそヌルついていたスペルマも、擦りつけられるうちに乾いていく。男が満足する頃には、汗気を失いガビガビになっていた。皮膚がぱりぱりして不快であるのに、霊夢は恍惚を表情に湛えていた。

彼は再び腰を浮かし、口元に亀頭をつきつけてくる。スペルマを塗り広げるためのヘラ代わりにしたことで、根元から先端まで白いものにまみれている。己を嬲り者にした——否、してくれたソレを、愛しげに見つめる。

「あむう……んちゅ、れるううう……っ」

劣るように口に含み、ゆっくりと舐め回していく。優しくもねっとりした、興奮を促す舌使いだっただ。

痺れる苦みと強烈な臭いが、口内を満たす。気にも留めない。むしろ、好ましいとすら感じながら、れるれる舌を蠢かしていく。へばりついたスペルマを、じっくり舐め溶かす。霊夢は良くも悪くも吝嗇の気が強い。たとえば味噌壺の味噌の使い切らない分などは、茹でた野菜でこそぎ落として、最後まで美味しくいただく。なおも残ったら、お湯で溶き汁ものにしたたりもする。

そうした性質を、今も遺憾なく發揮していた。ちゅう、ちゅうつと、男根に吸い付く。粘っこい汁だから。まだちゅうと尿道に残ってしまっているに違いない。それを啜り出すためだ。予想通り、濃厚な塊がにゅるりと吐き出された。ちゅうと得した気分で、んくつ、と嚙下する。

「ふはあ」

口を離す。ちゅうと顎が疲れてしまったので、口をぱくぱくして解す。腕の自由が効くなら、耳のちゅうと下あたりを揉みたい気分だった。

あれほど白濁にまみれていたモノは、すっかり綺麗になっていた。巫女の唾液にまみれぬらぬら輝いている。付着していた汚汁がどこに消えたかなど、考えるまでもない。全て、彼女の胃の中だ。

少女を辱めるだけ辱めて、ようやく彼は台の上から下りる。深い息を、ふむうと鼻から漏らした。

「さて、どうでしたかな、巫女殿？ 後で覚えてなさいよとおっしゃってりましたが、今でもまだ報復するおつもりで？」

「え？ あ、ええと」

「どのように詫げれば、私は許されるのでしょうか。金子でもなんでも差し出しましょう。」

まあ、素っ首差し出せというのは流石に勘弁願いたいところですが」

「許す……」

ほんやりと呷く。そういえば自分は、コイツに騙され嵌められたのだったか。すっかり忘れてしまっていた。貸しと恨みはいつまでも覚えていたタイプだが、それでも忘却してしまうほど、性の悦びは素晴らしかった。正直、アレを教えてくれただけでも不問にして良いくらいだ。

——いやいやそれじゃ駄目でしょ、と、彼女の中の小狡い部分が囁く。せっかく詫びてくれるっていうんだから、欲しいものとかねだっちゃいなさいよと。それはそれで、正論に思える。そして、今、自分が欲しいものといったら、一つしかなかった。

金ではないし、便宜でもない。

快樂だ。

「じゃあ、続きして」

「ほおう？　というと？」

「わかるでしょ？　もっと気持ちいいこと、してほしいの……っ」

男が浮かべたのは、邪悪で済まない表情だった。巫女をして喉を引きつらせるほどに。平時であれば、人間だろうが問答無用で退治していただろう。

だが今、彼女の目に、そんなものは映っていない。ただただ己の腹の疼きを堪えかね、はしたなくも腰をくねらせるばかりだった。

「なるほど。続き。もつと気持ちいいこと。なるほどね。となると、ハハッ。もはやコレ以外にありませんなアッ」

「あッ——あ、あああ」

再び、覆い被さられる。今度は互い違いではなかった。

肉棒の先端が、女穴に押し当てられる。未だ清いままでありながら、ひくツ、ひくツとしきりに収縮を繰り返す淫裂に。喉から漏れたのは、感極まった声だ。

男が何をしようとしているか、分からないほど霊夢も無知ではない。セックスしようとしているのだ。先ほど自分をあんなに素敵な気持ちにさせてくれた棒を、気持ちいい穴に入れる行為。いったい、どうなってしまうのか。分からないけれど、きっと素敵な思いができるに違いなかった。

求めるように、腰がくねる。ぬちツ、ぬちつと、音が響く。膣粘膜が亀頭と擦れることで、蜜がこねられ鳴っていた。

「おやおや、なんとまあはしたないことか。分かっておられますか？ 巫女殿。貴方は今、私にレイプされようとしているのですがね。そこらの馬の骨に、純潔を踏み躪られるのを

期待しているなどというのは、巫女として大問題では？」

「んう、そんな、そんな」

そんな、意地の悪いことを聞かないでほしい。

確かに巫女の仕事は幻想郷を維持する上で重要なことだ。けれども、情欲の疼きは、今まさに目の前にあり、自分を苛んでいるのだ。

今溺れるか、あとで破滅するか。どちらをとるのが正しいかなんて、一つじゃないか。

「ッあ、くッ、う、んッ、はあ、あうう」

男はゆつくりと、腰を前後させてくる。ぬちッ、ぬちッと、陰莖で膣口を擦り上げる。ちよっとした素股だった。

そう、あくまで「ちよっとした」行為だ。しかし霊夢の乱れようは、大したものだ。性粘膜から伝わる肉棒の存在感ときたら、魂を絡め取るかのように、彼女は既にその虜だ。入れてもらえなかったら、寂しくて泣いてしまうだろう。

「おねがい、はやく、ねえ、ねえつたら」

実際、半ば涙目になっていた。せつかく気持ちよくなれると思ってたのに、こんな風にお預けされるなんてひどい、と。人妖問わずシバいて回るあの巫女が!? と、彼女を知る者なら仰天するだろう。だが彼女とて、年頃の娘だ。悲しいことがあるれば泣きもするのだ。

「まあまあ落ち着いて下さい。何もセックスしないというわけではないのです。ですが、まあ、巫女殿の場合は立場が立場ですから。どの程度本気かどうかを知りたいのですよ」
「そんなの……本気だもん」

「ええ、そうでしょうとも。ですがそうだったことは、きちんと言葉や態度にしなければ伝わらないものでしょう？ 教えていただけますかな、果たして巫女殿が、どれほど強くセックスを望んでいるのか？」

にたりと、余りぎみの頬が持ち上がる。気色の悪い、悪意に満ちた笑みだ。が、そんなことはどうでもいい。シてもらえるかどうか。それが今の霊夢にとって最大の関心事で、それ以外は知ったことではなかった。

「——私、博麗霊夢は、今すっごくいやらしい気持ちになっけていて、あなたとセックスがしたくてたまりません。だからどうか、私におちんちんをください。あなたのおちんちんを私のおまんこに入れて、いっぱいズブズブして、気持ちよくしてください。どうかッ、どうかお願いしますっ！」

お前敬語使えたのか!? と、友人の魔法使いは言うだろう。当たり前のことじゃないか。傍若無人の気があるのは否定しないが、敬意を払うべき相手にはちゃんと払う。彼は自分を気持ちよくしてくれる人で、自分が欲しいものを与えてくれる人なのだから、尊重する

のは当然のことだった。

フォームと、彼はたつぷりとした顎をなぞる。六十点、と、小さく呟いた。

「もつと下品で下劣で卑屈なことを言わせてやりたくなるが、まあ、今のところはこんなものか。よく言えましたなあ巫女殿。ではお望みのモノを、くれてやるとしましょう」

「あ、はあ……ッ」

入口に対して水平に擦り上げていた竿が、垂直に押し当てられる。今からココを貫くぞと言わんばかりに。焦らそうなどという考えは、もはや一切感じられない。それが彼女に、強烈な期待を抱かせる。

ぞくッ、ぞくつと、体の奥が震える。純潔を奪われることへの悦びとスリルに、涙すら浮かぶ。この感覚だけで、どこまでも堕ちてしまえそうだ。

けれど、まだ駄目だ。今墮落してしまえば、最高の瞬間を最高の形で楽しめなくなる。おやつを食べ過ぎて晚のご馳走が入らなくなってしまうのと同じ。ここは我慢だ。

「では巫女殿、綺麗な自分にサヨナラをすることですな。今後貴方は、一時の欲望のため、つまらん中年に処女を売り渡した女として生きていくのです。そら！」

どちゅんッ、と、他ではなかなか聞かない音が室内に響いた。ぱんと、乾いた破裂音も。男は腰を突き出し、一刀のもとに彼女を深々と貫いていた。亀頭は容赦なく肉道を押し

広げ、道中の膜をもあつさり引き裂く。巫女の純潔は永遠に喪われ、奥の聖域すら蹂躪されていく。何ものも触れてこなかった粘膜が、肉竿にゴリゴリと抉られていく。

「あ——ッ、あああああああああッ！」

体を真つ二つにされたと感じた。実際、臓器に硬い異物を突っ込まれたも同然で、そう感じるのも無理はない。だというのに彼女は、これ以上ない悦びに震えていた。

いや震えるを通りこして、痙攣している。がくがくと全身を震わせる様は、先のアクメと比べてなお甚だしい。喉から上がった嬌声は、焼かれ焦がれるものでありながら、女としての悦びを表していた。

「はあッ、ああッ、ああッ、ああッ、あはあああッ」

みち、みちと、己の肉が押し広げられている。灼けた鉄の棒に圧迫されているがゆえに。まったく、なんという存在感だろう。コレを味わうために今まで生きてきたのだと感じずにはいられない。

「どうですか、巫女殿——いやもう、ただの博麗か。自分からレイプをねだり、純潔を差し出した感想というのを、是非お聞かせ願いたいものですか？」

「あはッ、はひ、へあ。あはあッ——」

そんなこと言われたって、無理だ。難しいことなど、何一つ考えられない。ただただ、

コレをもっと味わいたかった。

「はん！ 言葉も話せないか。それなら、そおらッ、墮ちるだけ雌に墮ちてしまえッ」

「あッ、は、ッ、ひッ、あ、あああああッ、あッ、あ、ひゃ、ッ、は、あああああ！」

間髪を容れず、男は腰を振りたくり始める。

今まさに処女だった女に繰り出すものではない、本気の、えげつないピストンだ。突き入れる動きでゴリゴリと膣内を押し広げ、引き抜く動きで肉壁を暴き立てる。博麗靈夢の膣穴を拡張し、自分専用に造り替えるストロークだった。

「あああッ、はひいッ、しゅご、ひいッ、あはあッ、あんッ、あん、あッ、あああッ！」

ぶぢゅッ、ぶぢゅつと、聞き苦しい音を結合部があげている。破瓜血混じりの愛蜜が、あたりにもき散らされていく。ごりゅッ、ごりゅつと、己の中からえげつない音が響く。そのたびに、目の裏が弾けるほどの性感によがらされる。

「あうううッ、ああッ、ああッ、あああ！」

「ははッ、ハハハ、まさかこれほど締めてくるとはッ、オオオ……ッ！」

がくッ、がくッ、がくッと、ピストンのたび体が跳ねている。ほんのり膨らんだ乳房が、ふるんつ、ふるんつと揺れている。少女特有の香りが、汗の匂いと淫臭に混じって漂う。退廃的かつ背德的な香りが、男に異様なまでの興奮を覚えさせている。

「かひッ、はひッ、あううッ、あんっ、あ、あ、あッ、あゝ……ッ！」

亀頭が秘肉を押し広げる。体内をみっちり埋められる、息が詰まる。引き抜かれ、襲がめくり返される。強烈な性感が全身でスパークし、喉が震える。

気が遠くなるほどの激しい陵辱を受けながらにして、彼を拒もうという考えは全くない。この行為に、霊夢はすっかり夢中だった。最早、性交なしで生きていられないほどに。

だから、拒否するどころか、積極的に受け入れる。自らも腰を振り、快楽を貪り始める。男の下で、柳腰がうねる。可愛らしいが、拙い。なにせこれが初めての性交である故に。そもそも自分自身抽送のたびにより狂っているほどの有様だというのに、巧みな性技を披露できるわけもなかった。

「オッ、オ、オ、やるじゃアないか、ならこういうのはどうだ、ええっ!？」

「アッ、はッ、あ、あ、あは、すご、いつ、あ、あああッ！」

が、それでも尚、博麗霊夢は天才なのだ。腰振りはぎこちないものではあるが、勘所を押えていた。男は射精欲と獣欲を大いに刺激されたようで、彼女の膣奥あたりをコンコンコンコンと突き始める。一番疼いていたところをノックされ、天にも昇らんばかりだ。

あのシックスサインよりも気持ちいいということ、元々大いに期待していた。しかしセックスは、想像していた以上のものをもたらしてくれていた。霊夢はすっかり色好みに

なっていた。目の前の行為を貪ること以外、頭にない。

だというのに、素敵な時間は不意に中断される。男が腰を引き抜いたために。

「はあッ、あうッ……あはッ、あッ、あはあ、ううんッ……」

途端、強烈な切なさが全身を襲う。ほんの十分も前までは、何も入っていないのが常態だったはずだ。今では、何か入っていないと落ち着かない。はやくはやくとねだり、空腰を振る。恨めしい視線を、男へ向ける。宥める言葉が返ってきた。

「まあまあ、そのような顔をなさらず。縛られたままだとしんどいでしょうから、解いてあげましょう。今さら、暴れもしないのでしょしね、あなたは」

暴れない、というところで、男の目が侮蔑の色を孕んだ。しかし実際、正しかった。

確かに自分は彼に陵辱され、貞操を踏み躪られた。ブン殴っても足りないことだと思っただがそのことについて、感謝もしているのだ。彼がいなければ、こんな気持ちいいことはできなかったのだから。

だから、騙したり薬を持ったことについて、今さら目くじらをたてようとは思わない。善悪相殺だ。今から気持ちよくしてくれるなら、天秤はむしろプラスに傾きすらする。

「ううん……はあ」

両手足に結わえられた縄が、ひとつひとつ解かれていく。久々の自由に、伸びをする。

ずっと大の字でくくられていたために、いくらか体が強ばっていた。手首足首には、アザにこそなっていないが、縄痕が赤く残っていた。

「ん、それじゃ、続き……」

男の方を見つめ、言う。瞳は、とても年頃の娘が見せるものではなかった。娼婦よりもはしたない、色に狂ったものだ。

可愛らしさを残した顔つきでそのような目をするのは、大変退廃的だった。男も感じるところがあつたのだから、愛蜜に塗れた下半身をいきり立たせている。

「良いでしょう、どら」

先ほどまで霊夢がくくりつけられていた台の上に、男は仰向けに寝転ぶ。彼女の体格で丁度良いサイズだったため、彼だとはみ出しぎみだ。

「えーと……?」

何をしようとしているか、いまいち判じかねた。疑問符を頭に浮かべていると、目線はこちらに向けてくる。

「いやなに、折角自由になったからには、それを謳歌できる体位がよいかと思ひまして。騎乗位はご存じですか？ 女が男に跨がり、男根を啜え込み、腰を振る、雌犬の体位です。今の貴女には、よおくお似合いですよ」

彼が意図する所は分かる。理由こそつけているが、要は自分を辱めたいのだ。自分から男の上で腰を振らせることで、一体なんて素敵なことを考えてくれるのだろう。自分から気持ちよくなれるなんて、最高だ。

「んふっ、失礼致します……っ」

拒むこともなく、躊躇うこともなく、いそいそと、台の上に乗る。太鼓腹は安定感抜群で、跨がるにはびったりだった。

「あはあッ……すっごお」

指先で男根を摘まむ。恐ろしく硬い。こんなにも立派なモノが自分の体内を掻き回していたのだと思うと、なんだか嬉しくなってしまう。

もっともっと、掻き回してほしいと思うのは、ある意味当然のことだ。生殖本能が囁くままに、ソレを膣口に押し当てる。

先ほど散々ほじくられたとはいえ、彼女のソコはまだ不慣れだ。あまりに逞しい異物の感触に、きゅっと窄まる。けれども、肉欲の疼きには勝てない。ゆっくり、腰を下ろす。

「アッ、は、あああああ——ッ」

雪の日に肩まで風呂に浸かったような、または一日歩き回ったあとに足裏を揉んだときのような声が漏れる。欠けていたものが埋められていく感覚は、たまらない恍惚と満足感

をもたらししてくれる。つい先ほどまで、欠けているのが当然だったというのに。

やがて彼女は、自ら男のモノを迎え入れる。根元までずっぽりとだ。少女の膣穴が黒光りする竿を啜え込む様には、それだけで春画になる卑猥さがあった。

「あはッ、あ、あんッ、あ！ はッ、あは、ああッ、ああん！」

博麗霊夢は貪欲なたちだ。挿入しただけで、満足するはずもない。すぐさま、腰を振り始める。すらりとしたウエストが、くねっ、くねっと同様に踊る。前後に、左右に、上下に蠢くたび、ぢゅぷッ、ぢゅぷっとはしたくない音を立て、淫膣がペニスをしやぶりたてる。

「あはあッ、すご、あはッ、中、中ぐりぐりって、あは、いいの、ああ！」

とてもこれが初めてのセックスだとは思えない、淫猥極まる腰使いだった。あがる声もそうだ。法悦を極めた嬌声を聞いて、彼女が純潔を喪ったばかりだと思ふ者は、幻想郷中探したって一人も見つからないだろう。

くびれた柳腰が、軟体動物のように踊る。そのたびに、肉棒が膣内を掻き回していく。イイところをカリが擦るたび、たまらないという声をあげてよがる。柔らかな乳房が揺れ、汗が珠となって散る。

その様に、博麗の巫女としての凜々しさなど欠片もなかった。ここにいるのは、ただの可愛らしい女の子で、いやらしい雌犬だ。

「くく、すっかり色狂いだな。どれ、雌犬に成り果てた記念に、イイモノをくれてやるとしようか、そらッ！」

「あッ！ は、ああッ、あああッ！」

どちゅッ！ と、一際大きな抽送音が響いた。男が器用にも、自らの腰を跳ね上げて、下から霊夢を小突いたのだ。不意に与えられた性感に、背を反らしよがる。後頭部を叩くエクスタシーに、目の裏が一瞬、光った。

「ッは！ あッ、はひッ、あうッ、ああん、やッ、ああ、あう、あーああッ！」

が、それで終わりではなかった。男はそのまま、何度も何度も、下から腰を繰り出してくる。どちゅ、どちゅと、雌穴から音が執拗に響く。逞しいピストンにより、ごりごりと、体内が押し広げられていく。

そうなると、もうだめだった。先ほど肉棒をしゃぶりにしゃぶった口腔から、ただただ熱い嬌声をあげ、快楽に酔いしれるばかりだ。

「そおらどうした、腰がお留守だぞ、ええッ!？」

「あああッ!？」

ぴしいッ！ と、抽送音とも違う打擲音が響いた。丸いヒップを打たれたのだ。それも、かなり鋭い一撃だった。きゅつと引き締まりながらも程よく脂肪を蓄えた、可愛らしく瑞々

しい尻肉に、掌の痕が残される。じくツ、じくツと、患部が熱をもつような痛みが、じわじわと襲いかかってくる。

「さらさら、腰を振れと言っているんだ、でないところだぞッ！」

「あッ！ やッ、やだあ、ッ、あうッ、あ！ あ！ あーッ！」

ぴしいッ、ピシッと、何度も平手が繰り返される。そのたびに痛みに襲われ、霊夢は喉から悲鳴を漏らす。

求められるまま、そして自ら求めるまま、懸命に腰を振り始める。うねっ、うねっ、ウエストを踊らせて、快楽を貪っていく。ぢゅく、ぶぢゅくと、卑猥な音が結合部から響く。はしたなく品のない腰使いで肉棒をしゃぶりたてるほど、エクスタシーに満たされる。

「ははは、そうだそうだ、それでいいんだ、そおらッ、ご褒美だッ！」

「あッ、ひ、ああああッ!? うそっ、うそつきいッ、やあッ、あ、ああッ！」

褒美と称して彼が繰り返したものは、やはりスパンキングだった。

罰としてお尻を叩かれるのは分かる。宿題を忘れたら頭突きされるようなもので、痛いのは罰になる。しかし、ご褒美でも叩かれるというのはどういうことだ。そんなのはもう、ご褒美ではない。つまり、彼が嘘をついたのだ。

「フン、人を嘘つき呼ばわりとは良い度胸だ。ちよっと躡けてやらないとナアッ！」

「ああああッ！」

變わらず彼女の両尻を叩きながら、男は抽送を繰り返す。丸い臀部は、執拗に撻られたことで猿じみて真つ赤に染まっている。だが、恥ずかしいと思う余裕すらなかった。痛みと快楽を同時に与えられ、訳が分からなくなっていく。混乱する頭の中で、二つが同一視され、結びつけられていく。

痛いのが、気持ちよくなっていく。

「ああッ、あッ！ ああッ、あああ、もっ、もっ、もっ、もっとお！」

叩かれるたびに、甘い疼きが体を駆ける。もっともっ々と求めるように、自らヒップを突き出してしまふ。

「はん、こんなにあっさりマゾに目覚めるとは。巫女などやっているべきではなかったよ、お前は。男に媚びて股を開くのがお似合いだ！」

見下す言葉すら、心地よいものを感じられる。朦朧とする意識の中で、恥ずかしいことも気持ちいいことも、全て曝け出していた。

「そおらッ、そらそらそらッ」

「ああッ、はひッ、はあッ、あ、あ、あ、それッ、そこ、ああああ……ッ！」

男のピストンは、一層激しくなる。最奥を執拗に小突いてくる。こつこつこつこつこつ

こつこつと、最奥の行き止まりをノックされるたび、どうしようもない性感に狂わされてしまう。本来なら上級者向けの行為であるポルチ才責めを、彼女は既に受け入れていた。何事にも通じる才覚は、こうした状況においても遺憾なく發揮されていた。

「さて、そろそろ出してやるぞ、雌犬。どこに出してほしいんだ？ 言ってみろ」
下から抉りながら、男は聞いてくる。思わず、眉尻を垂れ下げた。

どこ、と言われても、困ってしまう。

いや、いちおう希望はあるのだ。ただ、それが具体的にどこなのかわからないのだ。

困ってしまったので、彼に答えを委ねることにする。きつと彼なら知っているだろうと。

「一番、あは、きもちいいところ。きもちいいところに出してっ、いっぱいイかせてえ！」

「ッハ！ そろきたか雌犬！ そんな答えを返してきたのはお前が初めてだ。ハハハッ、随分とまあ、男をその気にさせるのが上手なようじゃアないか……！」

「あ、あ、あ、あああッ……！」

元々容赦のなかったピストンが、一層速くなつていく。摩擦で擦り切れてしまふようなほどだ。膣内で熱くなつていく肉棒を、夢見心地で受け入れる。そうしてとうとう、その瞬間が訪れた。

「そおら、一番気持ちいい射精だ。受け止めていき狂え雌犬が！」

どぢゅつ、と、およそ他では聞けない音が、体内から響いた。彼女の最も大切なところ、子を成すための聖域の入口、子宮口に、亀頭がぶつけられたのだ。

ごくごく小さな入口に鈴口が密着し、そして弾けた。睾丸から上った濁液が、勢いよく放たれていく。

腹の奥に、とてつもない熱が注がれている。沸騰した泥を、あるいは搗き立ての餅を、思い切りブチまけられているかのようだ。だというのに全く苦しくはなく、むしろ蕩けてしまうほどに甘美だった。

精虫はうぞうぞうぞと蠢き、彼女を墮落させるべく子宮を屈服させていく。今まで他者を受け入れてきたことのない繁殖器官は、アツという間に自らを明け渡した。自らを蹂躪する濁液に全てを明け渡し、捧げてしまった。

「ッ、あ、あ、ア——あああああああああ——ッ！」

ただでさえ快樂に悶えていたところに、そんなやりとりがあつては、アクメを迎えずにいられるわけもない。はしたない声を反響させて、霊夢は絶頂にいたる。

結合部から潮を噴き、背をぐんと弓なりに反らせて、全身で快樂を歌い上げる。視界は、真っ白に染まっていた。脳味噌に叩きつけられた快樂信号で、視覚が麻痺しているのだ。

頭の中は、多幸感でいっぱいだ。友人との弾幕ごっこ。里の人気の甘味屋で食べた饅頭。

河童にお裾分けしてもらったキュウリの浅漬け。鈴奈庵で借りた中でいちばん面白かったミステリに、異変を解決したあとの宴会。どれ一つとつても、自分をこれほどまでに幸せにしてくれたものはなかった。

自分がセックスなしではいられなくなったのだと、強く自覚する。もはや彼女は、博麗の巫女・博麗霊夢ではない。ペニスを見ては股を濡らす、一匹の淫らな雌犬巫女だ。

「あッ、は……ッ、ありがとうございます、う」

何か喋るだけの余裕などないというのに、自然と、感謝の言葉が漏れていた。こんなに素晴らしいことを教えてくれた彼を、敬うのは当然のことだった。

「ッはあ、まったく、搾り取られた……」

やがて、長い絶頂は終わる。霊夢は男の上で脱力し、でっぷりとした体に覆い被さる。恋人同士が抱擁するかのようでもあった。にしては、両者の外見があまりにも釣り合っていないかったが。

「ホォレ、起きろ淫乱」

「あうっ」

精液まみれの頬を、ぴしゃりと叩かれる。それでようやく、虚だった瞳に光が戻った。

「どうだったんだ？ 初めてのセックスは、説明してみろ」

「……あは、とつても、すぐくて、あんなの知つたら、もう……」
言葉は最後まで紡がれなかった。思い出すだけで蕩けてしまつて、とても続けることができなかった。

「素晴らしかつたろう？ もう戻れないだろう？ 狙い通りだよ、まつたく。だが、まあ——一発だけで終わりというのも寂しい話だよなあ、ンン？」

「え、あはッ、あ、おつきくなつて、あ、や、あはあ」

射精を終えて萎んでいたはずのモノが、中で硬くなつていく。ムクツ、ムクツと、あの逞しいサイズを取り戻していくのを感じながら、霊夢は目に期待を宿らせる。

「お前のような女を一発ハメただけで解放するのはあまりに惜しいからな。チンポ狂いになるまで徹底的に躑けてやるから、覚悟しろよ、ええッ？」

「あは、はい、もつといっぱい、気持ちよくして、あはあああッ……！」

男が腰を振り始める。まだまだこの素敵な時間が続くことを、彼女は心の底から嬉しく感じていた。